

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4393000106		
法人名	社会福祉法人光栄会		
事業所名	グループホーム りんごの里		
所在地	熊本県葦北郡津奈木町小津奈木2120-62		
自己評価作成日	令和 5年 1月 20日	評価結果市町村報告日	令和 5年 4月 4日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 九州評価機構
所在地	熊本市中央区神水2丁目5番22号
訪問調査日	令和 5年 2月 17日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

平成31年4月に開設し、4年目を迎えました。併設のデイサービスからの移行、特養への移行ができる仕組みも確立し、馴染みの環境で落ち着いた生活を送り、その後の交流も継続できています。「明るく、楽しく、元気よく」の理念をもとにお一人おひとりの生活ペースや習慣、能力を大切に、その能力が維持でき、心身ともに元気で穏やかに生活できるよう支援を行っています。開設から1年も満たない時期に発生したコロナウイルスにより、制限のある生活が続いていますが、その中でできることを模索しながら、その不自由さを軽減し、ご家族にも安心して頂けるよう心がけています。感染状況に応じて外部との交流も行い、今年度はガーデニングや季節の食材を使った調理レクを増やし、五感を使った暮らしに繋がるよう努めています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

入居者だけでなく職員も「明るく・楽しく・元気よく」の理念のもと日々の生活がおくられています。開設4年目の現在比較のお元気な入居者も多くみられ、訪問時は、職員と一緒にシーツを畳む入居者の姿もありました。日々の生活では「できる範囲」で役割を持ち、「できなくなったら」職員が手伝うを基本とした支援が行われており、職員面談では、毎日ケースバイケースで入居者を見ること、そのためには職員が入居者を見ることを大切にしている様子が聞かれました。コロナ禍であっても地域や外部との交流を絶つことなく、予防に配慮しながら関わりを持ち続けています。面会の受入れも難しい中で家族へリモート面会を提案した例もあり、家族との関係継続にも力を入れている様子が聞かれました。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	フロア内に理念を掲示し、月1回のミーティングの始まりに復唱し、共有に取り組んでいる。年間目標は理念を踏まえた項目を掲げ、達成できるよう努め評価を行っている。	「明るく・楽しく・元気よく」の理念は入居者・職員ともに事業所で過ごす皆の生活の礎となっている。職員から家族への報告の際にも理念が記載されていることもあり、職員間の共有も確認できた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍ではあるが、感染状況を確認しながら保育園やハモニカ演奏の慰問を屋外で行うことなどができた。保育園の児童へお礼の品を入居者様と一緒に作り、送った。	従来より近隣の保育園児や地域ボランティアの来訪受入れを行っており、入居者と関わる場面もある。現在はコロナ禍であるものの、感染対策を行った上での交流を継続している。コロナ禍以前は法人で認知症カフェ等も実施していた。町の美術館と法人のコラボ企画では事業所も関わった。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍により、認知症カフェの活動もできず、ほとんど中止となっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回の開催であるが、コロナ禍のため、昨年に引き続き、書面で報告し、意見を伺っている。委員の方々からは、入居者様が楽しく過ごせるように職員が工夫していることへの評価やコロナ禍での職員の対応への励ましの言葉を頂いている。	感染症予防により今年度は書面による報告であった。報告書類は郵送であるが、運営推進会議参加予定者には電話等により連絡し、意見をj得ている。報告書類には返信シートを用い、意見の有無に関わらず返信を得ている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	介護保険や福祉の関連での連携会議等は、開催されなかったが、必要な際の電話等での連絡は行っている。	コロナ禍により従来の会議等の開催は開催されなかったが、日常的な報告・連絡・相談等は訪問や電話等で行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	3か月に1回の委員会を通して、身体拘束の実態を確認している。2回/年の施設内研修で繰り返し学び、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	身体拘束をしないケアのための研修はオンライン動画等も活用しており、職員のストレスチェックも行っている。年1回の虐待の芽チェックシートは管理者の確認・評価を得、毎年行うことで注意喚起となっている。フォローアップ研修では「不適切な言葉」として職員から意見が出た事例について話す場も持った。	

グループホームりんごの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設内研修にて不適切ケアについて繰り返し学び、年1回、虐待の芽チェックシートを行うことで虐待への認識を深めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	検討の必要性があった場合は、社協の窓口へ相談できるよう、関係性を構築している。また、施設内の生活相談員に相談できる環境を整えている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用契約時には丁寧に説明し、十分な理解・納得をして頂くよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に1回満足度調査のアンケートを実施している。コロナ禍での面会制限により、ケアプラン更新時や電話連絡時に要望や意見等を確認している。また、毎月、報告書を送付し、全体の様子や一人一人の状況を伝えている。	コロナ禍により従来のような家族面会の受入れが難しい状況も続いているが、オンラインや窓越しの面会等、工夫して家族との関係が希薄にならないよう、意見を表しやすい関係継続のために取組んだ。家族への電話連絡は担当職員だけでなく管理者・ケアマネージャーも行い、家族の意見を直接聞く機会を作っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者による年に1回の面談を実施し、様々な意見や要望を聞く機会も設けている。月に1回のリーダー会議や運営会議を通じて職員の意見や提案を聞く機会を設けている。	職員は日頃よりリーダーや管理者に意見を述べることのできる体制である。毎月の職員会議では業務等に関する意見も出される。事業所の困りごと等は法人のリーダー会議でも伝えている。管理者より年1回の職員面談も実施している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	現状の把握は管理者を通じて行っており、給与水準の見直しを図っている。コロナ禍で研修の機会は少なくなったが、Wi-Fi環境を整備し、オンラインで参加可能な研修へは積極的な参加を促した。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の必要とする研修はできるだけ全員が受講できるように時間の設定に配慮した。また、オンライン配信研修の活用に加え、シュミレーション研修の実施やより具体的に実践に則した研修報告書の書き方にも工夫を行った。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍において地域密着部会は、リモートでの開催に管理者が出席し、近隣でのコロナ感染の情報や実際の感染対策やクラスターへの対応などの情報を得ることができている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にご本人、ご家族から生活歴や趣味、嗜好等の情報を得て、不安なことやわからないことがないように説明を行った上で、ご本人と関わりを多く持ち、安心して生活できるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居時にご家族の要望や不安なことに関して話せる機会を作り、その後も良好な関係を保てるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	アセスメント時に本人が望まれている生活を理解し、必要な支援を見極め、適切な対応ができるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	人生の先輩として尊敬の気持ちを持ち、得意なこと、できること、できないことを把握し、その能力を発揮できるよう支援しているが、不足している部分がある。昔からある行事や知恵等教えてもらい、いい関係性ができるよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月、状況報告書を送付し、コロナ禍の面会制限によるご家族の心配や不安を軽減できるよう努めている。感染状況によって、リモート又は窓越し、必要に応じて対面での面会を実施。本人を支えるため、電話で相談し、一緒に対応法を考えていただくこともある。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で外部との交流は難しいが、施設内の交流は継続している。馴染みの方とは電話や手紙等で関係を保てるよう支援している。	感染対策を工夫しながらできるだけ家族の面会を受け入れている。法人運営の特養やデイサービスも隣接しており、利用者同士の交流は継続している。家族等と手紙のやり取りや家族行事へ参加する入居者もおられる。春には入居者に馴染みのある役場近くへの花見ドライブに出向いた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者様同士の関係を観察し、必要時には職員が間に入り会話をつないだり、不快な思いをしないよう対応を行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	施設内の特別養護老人ホームへ移行された方には、りんごの里での行事と一緒に参加して頂いたり、気軽に行き来してもらうことで、関係性を保つようしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	これまでの生活歴や習慣を踏まえ、日常生活での会話や表情、行動から心情を察し、本人の思いや意向の把握に努めている。	現在は思いを表すことができる入居者も多く見られることから、日頃の職員の寄り添いや会話等で意向を把握している。事業所から家族への状況報告も行っており、電話等で家族の希望や意向の確認も併せて行っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントの際、生活歴や環境について把握し、サービスに活かせるよう努めている必要時は家族に連絡し、確認している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の会話や行動、表情、バイタルサインなどを参考にして心身機能の把握に努めている。状態の変化はケース記録や申し送りノートに記載、情報を共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	モニタリングの情報や毎月のミーティング時に得られた課題や改善点等をケアプランに反映させている。家族への相談や報告を行い、現状に即したプラン作成に努めている。	毎月ユニット会議を行い、入居者の様子を共有しており、ケアについての提案等があれば試みている。基本的にモニタリングは半年に1回、状況に応じて3ヶ月程度で行い、介護計画の見直しは年1回を基本としている。記録の書き方・見方、特記事項の記録等について話す機会も持ち、職員間の共有・統一に取り組んでいる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子や変化、気づきを記録し、情報を共有できるよう努めており、申し送りノートも活用し、今後のケアに繋がられるよう努めている。		

グループホームりんごの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	毎日の生活の中で出た要望を取り入れながら入居者様の思いに応えられるよう努めている。ご家族が困難な場合には受診同行も行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍で地域との関わりを持つことが難しい状況ではあるが、美術館とのコラボ企画に入居者様も参加して頂いた。コロナ禍でも地域と関わりが持てるよう更なる検討が必要である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力病院による月に1回の訪問診療、訪問歯科を受け体調管理の面で連携を図っている。必要に応じて専門医の受診支援同行も行っている。ご家族の希望により入居前のかかりつけ医を継続している方もおられる。	入居時の本人・家族の希望により以前からのかかりつけ医の継続受診を支援するが、現状は殆どの入居者が協力医の受診(往診)となっている。専門医受診は基本的に家族による通院をお願いしているが、コロナ禍であることから現在は職員にて行っている。協力医ではできない検査や必要とされる場合は職員による通院・付き添いも行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	施設内の看護師へ相談できる環境を整えている。 今年12月より看護職が入職したことにより、今後は充実した健康管理ができるよう努めていく。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力病院との年2回の連携会議の開催は、コロナ禍のため、実施できていない状況であるが、電話等で必要に応じて情報交換や相談を行い関係性の維持に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時リビングウィルの確認を行っている。重度化した場合は主治医も含めて家族様とも話し合い、法人内の特別養護老人ホームへの案内も行っている。	入居時に事業所の方針や考えを説明し、入居者・家族の希望を確認している。実際にその時を迎えた際には医師や関係機関・家族との話し合いを都度重ね、支援を行っている。現在は入院や特別養護老人ホーム等、入居者本人にとってよりよい生活環境の案内も行い、次の生活の場を選択されるケースが殆どである。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の連絡体制やマニュアルを作成し備えている。施設内研修にて緊急時の対応についても学んでいる。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回の消防訓練を実施している(日中・夜間想定、火災・地震災害想定)。ポータブル発電機の試運転など定期的に行い、運転方法を共有している。	事業所は法人の事業所と同じ建物にあることから、消防訓練は法人全体で行っている。停電に備え、法人委員会担当職員がポータブル発電機の確認も行った。非常食の期限が近づいている際は、給食会議で献立に保存食材を利用することも議題とし取り入れた。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの人格を尊重した言葉かけや対応、人生の先輩としての尊敬の心を持った対応を心がけているが不十分なところがある様に感じている。	入居者一人ひとりを尊重した言葉掛けや言葉遣いについて配慮している。日頃の生活の中で、声の大きさ等気になる事例が見られたことがあり、職員の継続した意識付けが必要と感じている。	日頃心配な事例は見られないようですが、稀な事例の際には職員間の共有も行われていました。言葉掛けや対応について職員間で継続して振返る機会を持ち、意識付けの機会作りに期待します。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	一人ひとりが思いや希望を言えるような環境作りを行い、自己決定が出来るよう努めている。うまく伝えられない方には、表情や会話などから読み取るようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	できる限り一人ひとりの意向に沿って、その人のペースに合わせた対応を心がけている。日々の中で要望を聞き、活動に取り入れている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問理美容、馴染みの美容室の利用を継続している。好みに合わせた身だしなみができるよう、ご家族に協力してもらいながら支援している。ほとんどのの方が自分で服を選んで着られている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	自分たちで育てた野菜や季節の食材を使った調理やおやつ作りを行っている。地域の祭りの日には、その当時を思い出しながら味わっていただけるようなメニューにしている。	食事は法人厨房で調理され、地元の食材や季節を感じる献立が提供されている。3ヶ月ごとに給食会議が行われているが、体調による食欲不振等の状況は随時伝えることができる。行事食も提供されており、事業所内ではおやつを手作りする機会もある。移動販売車ではお菓子やパン等購入する姿も見られる。	

グループホームりんごの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分摂取は記録し、管理しているが、必要に応じて医師や栄養士に相談している。摂取量が少ない方には嗜好品や代替品を提供するなどの工夫をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	ほとんどの方が食事後自ら歯磨きを行っているが、声掛け、見守り介助が必要な方には支援を行っている介入が難しい方もいるため訪問歯科の利用および指導は、助かっている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自立されている方が多い為、トイレでの排泄が継続できるよう支援している。パットの種類の工夫や夜間のポータブルトイレの使用、トイレへの誘導の声掛けは個々に合わせて行っている。	現在は自立されている方が殆どである。パットやリハパン等の利用については入居者それぞれの状況に合わせている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日チェックを行い、水分を多めに摂ってもらうよう、また適度な運動も取り入れるよう努めている。状況に応じて医師に相談し、便秘薬を調整しながら、対応を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2回午後に行っている。体調によって曜日や時間をずらすなど柔軟に対応している。残存機能の維持ができるよう努めている。個々の状態に合わせて、リフト浴も使用している。	週2回午後を基本としているが、入居者の体調や予定等により臨機応変に対応している。車椅子利用者もおられるが、できるだけ浴槽に入って頂きたいとの思いからリフト浴も利用し、入居者の心地よい時間となるよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	これまでの生活習慣や状態に合わせて、支援をおこない、体に負担の無いよう、日中も休息してもらうよう静養時間を設けている。また、室内の温度や湿度に注意するなど環境にも配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情書をファイルし、その都度確認できるようにしている。誤薬などが無いよう服薬時の確認を丁寧に行っている。処方の変更になった場合、家族に報告し、状態観察を行っている。		

グループホームりんごの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	趣味や得意なことを継続できるよう支援している。役割としての家事活動や行事など楽しみを持って生活できるよう取り入れ、継続している。お花や野菜をプランターで育て、収穫したものを調理に使用するなどしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍が続き、外出支援はほとんど実践できなかったが近くの公園に花見ドライブに出かけた。また、屋外でおやつを食べたり、周辺の散歩等行った。	コロナ禍であることから計画による外出支援は難しい状況であったが、桜の時期には入居者に馴染みのある場所へドライブに出向いた。日常的には職員と一緒に散歩、畑での野菜栽培やお世話等、外気を感じる機会を持っている。敷地内には季節ごとの花も咲き、目を楽しませる。家族行事に参加する入居者もおられる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	コロナ禍で外出しての機会は少ないが、施設内の商店を定期的開催することでお金を使う場面は継続できている。昨年末より、施設内の商店から移動パン屋やセブンの移動販売に移行した。お小遣いは、自己管理している方、定期的に一定額を渡している方、職員が管理支援している方と個々に合わせ対応している。買い物の依頼には職員が対応している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望時には自由に電話ができるよう支援している。手紙の投函の希望があった場合は職員が対応している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	一緒に作った季節を感じられる製作物を飾ったり、季節の花を飾ったりしている。また、室温・湿度にも配慮している。室内は自由に行き来できるよう安全な動線を確保し、快適に過ごせるよう努めている。	入居者が過ごす時間も長いので、入居者が過ごしやすい環境作りに配慮している。席位置の配慮だけでなく、テレビの場所を変える等レイアウト変更も試行している。食卓の他ソファもあり、入居者の好みの場所で過ごすこともでき、窓からはプランタの花も愛でることができ季節を感じる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者様同士の関係性を考慮して席の配置をしている。入居者によっては、場所を移動して外を眺めることで落ち着いた時間を過ごせるよう支援している。		

グループホームりんごの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室に馴染みの物を持ち込んで頂いたり、好きなように飾ってもらったり居心地よく生活できる空間になるよう支援している。また、ベッドや家具は本人の行動などを把握し、安全を考慮して配置している。	入り口にネームプレートが掲げられた居室には洗面台付の部屋もある。希望により布団を利用する方もおられる。室内には贈られた花や写真、位牌等、家族を感じる。自室を掃除する入居者もおられる。居室入口上部には車椅子等歩行状態が絵で示されており、避難時の備えもなされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	安全に移動ができるよう動線を確保し、環境整備を行っている。		

2 目 標 達 成 計 画

事業所名 グループホーム りんごの里

作成日 令和 5年 4月 1日

【目標達成計画】

優先 順位	項目 番号	現状における 問題点、課題	目 標	目標達成に向けた 具体的な取組み内容	目標達成に 要する期間
1		一人ひとりの人格を尊重した言葉掛けや対応、人生の先輩としての尊敬の心を持った対応が不十分である。	プライバシーに配慮し、尊敬の心を持った声掛けを行う。	本年度、事業所の目標に掲げた「目配り・心配り・気配り・言葉配り・手配り」を意識し、定期的に評価する。	12か月
2					
3					
4					
5					

注1) 項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2) 項目数が足りない場合は、行を追加すること。

